



妖精の小瓶



猫ト みかん

※パック

シェイクスピアが『真夏の夜の夢』で描いたことで一躍有名になった妖精。それ以前は悪魔の代名詞ともされていたが、性格や特性も、シェイクスピアの描いたパックが今では典型となっている。

変身能力をもった悪戯もので、愉快的ことが大好き。ブラウニーと同じく、家の掃除をしてくれる性格も持つ。

パックは朝日が昇ると同時に、ぱかっと大きな目を見開いた。

大きなベッドのほうを見ると、この家の主であり、たった一人の家族である青年はまだ健康なびきをたてて眠っているところだ。

「ようし！ 今日こそは一、やるぞやるぞうっ」

パックはぴょんと一跳びで布団を跳ね除け、素早く部屋の隅に押しやってから、ぶんぶんと頭を振って寝癖を直した。二回大きな瞬きをして、眠気も完ぺきに追い払う。

「まずはっと」

元気よく外に出て、たちまちの内に戻ってくる。両手にいっぱい、棘のついた実を抱えていた。

「ほー、ほー、ほー！」

独特の笑い声を出しながら、ばらばらとその実をベッドの傍らに置いてあった青年の靴の中へいっぱいに入れる。

「さあて、お次は」

軽く手を払うと、短い足で素早く駆けて、台所の戸棚をぱかっと開けた。

蜂蜜を取り出して、青年の椅子に丁寧に塗りたくる。

ヤカンには、カエルを一匹入れておく。

砂糖と塩は入れ替えて、パンの中にはタバスコを。

「うーん」

ベッドで青年が起きる気配がした。

「おっといけない」

仕上げにどろんとリンゴに化けて、テーブルに広げた皿にちょこんと着地した。

さあて、今日こそは、とパックは笑いをこらえながら、起きてくる青年の様子を窺った。

青年は腕を突き上げて伸びをして、今まさに起きたところだ。片手をあくびにかざしながら、もう片方の手で垂直に立っていた後頭部の髪を下ろす。

まだ眠そうな顔をしながら、ベッドの脇に足を下ろした。

さあそこだ、とパックは気持ちで拳を握る。

青年はしかし、足よりも先に手を靴に下ろすと、さかさまにして、棘のついた実をすっかり床にばら撒いた。かかとを床で叩いて、最後の一個までこぼしてしまうと、ようやく安全になった靴に足を入れる。

まあまだ序の口だからな、とパックは悔し紛れに鼻を鳴らした。

食堂までやってきた青年は、台所の水道で顔を洗うと、ようやく目の覚めた顔になった。

まったく、いつ見ても不機嫌な顔だな、とパックは思う。ぼくなんか、朝起きた時は今日はどんな愉快的悪戯をしようか、ウキウキしてたまらないのに、少しは見習いたまえ！ と心の中で胸をそらした。今はリンゴなので、不自由な体が少し窮屈だ。

青年は、タオルで顔を拭くと、それをそのまま水で濡らしてぎゅっと絞った。椅子の傍らまで来ると、膝をついてパックが塗った蜂蜜を拭う。

むむ、さすがだな、しかし今日の悪戯はこれだけではないのだぞ、とパックは息を吸い込んだ。リンゴの体がわずかに揺れてしまったのを、慌ててぴたりと静止する。

拭いたタオルを流しに置くと、青年は戸棚の背の高い扉から、新しいパンを取り出した。新しい皿にそれを乗せて綺麗にした椅子に座る。

あんな背の高いところに新しいパンを隠しておくなんて卑怯じゃないか！ とパックはよっぽど訴えたかったが、リンゴが口を利くわけにはいかない。もう少しの辛抱だ。

青年の手がリンゴのパックに伸びる。

来た来た、とパックはほくそ笑んだ。青年が手に取った瞬間に変化を解き、どどーん、と驚かせてやるつもりだった。

しかし、青年の手は、パックのリンゴに触れる寸前でぴたりと止まり、引き返す。

何だ？ どうした？ とパックがそわそわしていると、台所から果物ナイフを持ってきた。

おいおいまさか！ とパックが赤いリンゴを青ざめさせる。真っ直ぐ下ろされたナイフを寸でのところでころりとよけた。

「なんていうことをするんだい！ ひどい！ 人でなし！ 暴力反対！」

驚いたパックは変身を解き、テーブルの上から転げ落ちて、ぴょんぴょんと飛び跳ねながら騒ぎ立てた。

「君に言われたくないね」

青年はにこりともせずパンをちぎる。

「ぶー」

パックは鼻の頭に皺を寄せ、これでもかというほど唇を突き出した。とっておきの面白い顔だ。

「お湯を沸かして、お茶を淹れて」

しかし、青年はやはり片頬も上げず、淡々とした声も変えない。

「へいへいほーい」

パックはいつもの位置まで唇を引っ込めて、しかたなく流しへ向かった。ヤカンに水を入れようと蓋をあける。仕込んでいたカエルがぴょこんと飛び出して、パックの顔にぺたりと張り付いた。仕込んでいたことを、パックもすっかり忘れていたのだ。

「ぎゃっ」

とパックは叫び声を上げたが、青年はちらりと一度目をやっただけで、特に反応もせず、黙々とパンを食べていた。

「ったくよー」

パックは眉間に皺を寄せる練習をしながら、床にホウキをかけていた。今朝、青年がばら撒いた棘のある実が、あちこちに転がって面倒なことになっている。

「このぼくがこんなに毎日、面白い悪戯をしてやってるっていうのに、どうしてあいつはにこりともしないのかねえ。ぼくがこんなことを毎日されたら、笑い転げて腹を壊すくらいだったのに、どうしてあいつは笑わずにいられるのか。楽しくないっていうことかい？ 愉快じゃないっていうことかい？ いいやいいや、そんなはずはあるものか。あいつはきっと笑い方を忘れていないに違いない。ぜひともぼくが教えてやらなくちゃあ！ ああ、ぼくときたら、何て親切なんだろう！」

パックはホウキを振り回して、くるくると回った。その拍子にちりとりをひっくり返して、今までようやく集めた棘のある実が、再びばらばらと床に散らばった。

「ああっ」

「間抜け」

パックの悲痛な叫びに、青年の愛想のない声が重なった。

見れば、窓から青年がこちらをのぞいている。農作業の途中なのだろう。頭に白いタオルを巻き、両手に肥料の袋を抱えていた。

「間抜けとは失敬な！ ここは笑うところだぞ！ 右の唇の端と、左の唇の端を同時に上げて、にこっ、だ。さん、はい！」

指揮棒のようにパックはホウキを振って青年に笑顔を促した。青年は斜め上を見上げて、しばし考えているようだった。

「いや、笑うところじゃないだろう」

そしてそういう結論に達したらしい。

「笑えよー」

がっくりとパックは肩を落とした。

「……お前は、どうしてそんなに俺を笑わせたいの？」

青年が不思議そうに尋ねる。

「どうしても、何も、パックの生きがいたいっ」

「ふうん」

「笑うと楽しいだろう？ 笑った自分も楽しいし、笑ってくれた顔を見るのも楽しい。それがパックの生きがいだ」

えへんと胸を張って、パックは鼻を高くしようと努力した。しかし、パックの変身能力を持ってしても、それは少々難しかったようだ。高さの変わらなかった鼻を、くすぐったように指で擦る。

「それなら、俺なんかのところにいないで、もっと笑ってくれる奴のところへ行ったら良いんじゃないか？」

青年が言った。声は相変わらず淡々としたものだ。

「何を言っているんだ？ それじゃあ、お前はいつまでたっても楽しくなれないじゃあないか」

「うーん。そう断言されるのもどうかな」

「それに！ お前を一度も笑わせられないまま出て行くなんて、パックの股間に関わるからな！」

青年に指を突きつけて、パックは高らかに言い放つ。

「……」

「……」

「それも、笑うところ？」

「笑えよー！ もしくは汚券だろって突っ込めよー！」

「いや、面白くないし。それに、品のない話には突っ込みたくない」

それだけをやはり淡々と言うと、青年は抱えていた肥料の袋を持ち直し、農作業に戻っていた。

「うーっ、今に見てろよ！ 腹を抱えて涙の出るほど大笑いさせてやるからな！」

背中で片手を上げた青年が、実はほほ笑んでいたことを、パックは残念ながら気づくことはできなかった。